

「がんばる」における新旧の意味要素

川 岸 克 己

The Old and New Meanings of *Gambaru*

Katsumi KAWAGISHI

要 旨

「がんばる」のもつ両義的な意味要素について論じる。「がんばる」には、従来の意味と新しい意味があり、両者には差異が生じている。従来の意味は、「自分が望まない方向への流れに抗い、自分が望む方向への流れを掴もうとする変化への希求」と定義した。新しい意味は、「自分が望む方向への流れを掴もうとする変化への希求」と定義した。そして両者に共通するのは、「現状に満足せず、現状を打開する変化を希求する」ことであると結論した。

また、今日「がんばる」が使用される状況において、この語を使用する側と使用される側との間に認識のずれが生じることについて指摘し、望まれる使用についても考察した。

キーワード：「がんばる」、意味要素、辛抱、挑戦、変化

1. は じ め に

本論は「がんばる」の意味要素の検討から、同語の今日の両義的な意味の本質について考察する。この語は今日頻繁に使用される語のひとつであるが、同時に運用上の問題も抱える語でもある。

「がんばる」は、いわば「外的あるいは内的な困難に対し、耐え忍ぶ、あるいは、行為を遂行する」といった意味である。自らを鼓舞する、あるいは他者を激励する語ではあるが、あえてこの語の使用を避けることがあったり、その意図とは裏腹に他者を不快にさせてしまうことがあったり、とその使用は容易ではない。とはいうものの、実に頻繁に、もはや挨拶語と言ってもよいほどの頻度で使用されてもいる。

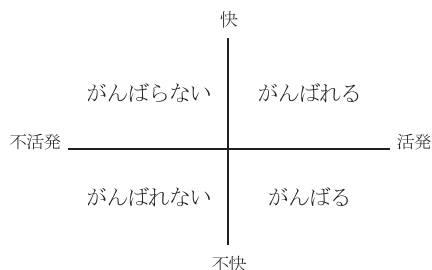
そこで、「がんばる」の意味要素の構造について、上記のように「がんばる」の語がいわばネガティブな意味合いで捉えられてしまう状況を踏まえつつ、新たにポジティブな側面をも意味する、両義的な意味要素を有する語として、考察する。

2. 「がんばる」についてのこれまでの考察

2.1. 2つの拙論

筆者はかつて「がんばる」について、2つの論文にて考察したことがある。

ひとつめは、『頑張る』における構造と変化」(2011)において、「がんばる」には2つの意味が混在して認識されていると論じた。「がんばる」には、「自分の持てる力を存分に発揮し、目標達成のために活動する」という意味と、「困難に対してじっと堪えて容易には諦めず、それを継続させる」という意味があるとした。これらを整理し、「がんばる」には、<活発/不活発>と<快/不快>の2つ意味基準(右図参照)があり、「がんばる」という語を構造化していると論じた。そして、「がんばる」は、「心情的には不快ながらも、活発な行動を起こす」という意味の語であると定義した。



ふたつめは、「フロー理論で構築する「がんばれる」の概念構造」(2011)において、チクセントミハイのフロー理論を援用し、「がんばる」のもつネガティブな要素をどう解消することが出来るかについて論じた。「がんばる」の分節意味基準のうち、<快/不快>に焦点を当て、もっとも理想的な状態を「がんばれる」であるとした。「がんばる」における<不快>を<快>に変換するためには、明確な外部の根拠が必要であることを指摘した。これらの研究は、記述的な論考というだけでなく、今日多用される「がんばる」をより正確に使用するための理解を目的とするものと位置づけ、論考した。

2.2. 天沼論文

「がんばる(頑張る)」を詳細に考察した論文に、天沼香「時代相の変化とコア・パーソナリティー - 『頑張る』日本人と『頑張らない』日本人 -」(2001)がある。同論文は、「がんばる(頑張る)」をめぐって変化したものの変化しないものとを比較しつつ、今日の「がんばる(頑張る)」をめぐる状況を論じている。

「頑張り」「頑張る」という語感が日本人には肯定的に心地よく響くことを意味しよう。しかし他方、昨今では「頑張らない」と「頑張る」ことを否定するかたちの表現も見られるようになってきた。これは以前では考えられなかったことである。(中略)我われ日本人は従前どおり「頑張る」ことに意義を見出しながらも、20世紀末から21世紀初頭にかけての時期において「頑張らない」ことにも意義を見出し始めているのかもしれない。(p131)

「がんばる」ことに一定の意義は見出しながらも、その否定形である「がんばらない」にも価値を見出しつつあるのが現在の状況であるとしている。先にあげた、2つの論文において、「がんばらない」は、その意味要素として、<快>と<不活発>との2つの意味要素によって形成された語句であるとした。つまり、<不快>で<活発>「がんばる」の真逆の意味をもつ語句である。

しかし、この天沼論文では「がんばらない」が「がんばる」という行為そのものを否定しているのではなく、「がんばる」という遂行的な行為そのものは保持しつつもそれをどう気持ちの上で活性化させるかについて認識が変わったのだという点に焦点を当てて論じたものと思われる。つまり、川岸論文に引きつけて言うならば、「がんばらない」は、<快>であることに意味を変換させた逆説的な表現であると言える。詳細についてはまた後述する。

3. 課題提起

これらに共通するのは、従来の「がんばる」に違和感が生じていることを指摘し、新しく生じた「がんばる」に対する認識と、これからの「がんばる」の在り方について考察している点である。天沼2001は、論文の最後でこう述べている。

我われ日本人は、これまでのようにともすれば主体性を欠落させ、ただただ「頑張っ」てきた、あるいは「頑張ら」されてきたような方向性を改め、よりよいかたちで「頑張り」を発揮したり、がむしゃらに「頑張る」のではなく、時には「がんばらない」ことを志向するようになるのかもしれない。(p138)

つまり「がんばる」に一定の価値を見出しつつも、否定的な価値観をもつようになった結果、新たな価値観を有する表現が生まれてきていることを指摘している点であろう。

今日、「がんばる」は、依然頻繁に使われており、自分自身つい口について出てしまう語である。「がんばる」の否定的な価値観の存在を知りつつも使用してしまうところに自分でも矛盾を感じつつも、解決できない状況にある。したがって、なぜこのような違和感を感じつつも「がんばる」は多用されるのかについて考察されなければならない。すなわち、これは「がんばる」は違和感を覚える語であると同時に、掛け替えのない語でもあることを意味することに他ならない。

例えば、いわゆる「ら抜き言葉」が誤用だと断ぜられても、実に多くの日本人がその「ら抜き言葉」を使用するが、そこには使用するに値する表現性が存在するからである。ら抜き言葉を誤用とする根拠は規範意識によるものであり、語そのものの構造と変化に妥当な眼差しが与えられているとは言い難い。むしろ、ら抜き言葉は、従来の同一の表現の中に共存している「可能」と「受身」を別の語によって区別しようとした、合理的な表現への変化であった。したがって、「がんばる」の意味についても、価値的な判断の前に記述的な考察が必要である。

そこで、本論は、「がんばる」における、その掛け替えのない意味要素とは何か、について考察する。そして、我々はどのように「がんばる」という概念を認識し、行動すれば良いか、その可能性についても考察する。

4. 意味要素分析

4.1. 従来の意味要素

まず手始めに「がんばる」がもつ意味要素を今一度整理しなおしてみよう。まず、「がんばる」に対する一般的な理解はどうなっているか。

『日本国語大辞典』では、「がんばる」の意味を6つに分けて記述している。

- ①たしかめて覚えておく。目をつけておく。ねらう。
- ②目を大きく見開いて、物を見据える。特に、歌舞伎で、役者が見得を切る時に目を見開く。
- ③見張りをする。
- ④頑強に座を占める。一所にじっと控えて動かないでいる。
- ⑤困難に屈せず、努力しつづける。忍耐してやりとおす。
- ⑥自説を強硬に主張する。また、頑固に意地を張る。我を張る。

本論であつかう「がんばる」の意味として問題になるのは、⑤である。①②③は、「がんばる」の語源的な意味であり、ここでは取り扱わない。⑤の「困難に屈せず、努力しつづける。忍耐してやりとおす」という意味は、従来の「がんばる」の意味である。さらに⑥の「自説を強硬に主張する。～」は、⑤の意味と同類の意味といえるだろう。

『大辞林』は「がんばる」を3つの意味に分けている。

- ①あることをなしとげようと、困難に耐えて努力する。
- ②自分の意見を強く押し通す。我を張る。
- ③ある場所を占めて、動こうとしない。

本論の「がんばる」の意味要素としては、①が「困難に耐えて」という記述からもわかるとおりに従来の「がんばる」の意味を表している。

『岩波国語辞典』も同様である。

- ①忍耐して、努力し通す。気張る。
- ②ゆずらず強く主張し通す。

①が従来の「がんばる」の意味を表している。

ここまで紹介した3つの辞書では、「がんばる」について、語源的な意味での「がんばる」と従来の意味での「がんばる」の記述が主であった。つまり、ここで取り扱う「がんばる」に関しては、辞書には従来の「がんばる」の記述しかないことがわかる。辞書にかぎらず日本語使用者においても、「がんばる」の意味について内省するとき、これらの辞書と同様の認識に至るだろうと推察される。

しかし、『新明解国語辞典』においては、新しい記述が見て取れる。同辞典は「がんばる」の意味を3つに分ける。

- ① 外圧や困難に屈することなく、最後までやり信念を貫き通す。
- ② 持てる力をフルに出して、努力する。
- ③ ある場所を占拠して、絶対動かないという姿勢を見せる。

そのうち①はこれまでの辞書と同様の意味であるが、②の「持てる力をフルに出して」という記述は、他の記述とは明らかに異なる。さきの辞書は、「困難」や「忍耐」という、いわば「辛抱」することによって、目的を達成しようというのが「がんばる」の意味であると規定しているものと思われるが、『新明解』のそれは「辛抱」という消極的な意味合いはなく、もっと積極的な、いわば「挑戦」とも言うべき意味合いを感じさせる。これは「がんばる」の意味を記述するうえで重要である。先に天沼2001の引用部分について言及した際、「がんばらない」が「がんばる」という行為そのものを否定しているのではなく、行為そのものをどう活性化させるかについて認識が変わったのだと述べたが、これがまさにそれであろう。

その『新明解』の②の用例として挙げられているのは以下の文例である。

- ・日夜工事の完成に頑張る。
- ・合格を目指して勉強を頑張る。

用例を見る限り、従前の用法との違いが判然としないが、「完成」や「合格」といった前向き

な目標を明示しながら、意欲を持って行動するという点で、従来とは違うものが認められる。

ともあれ、これらの一般的な理解の代表とみなすことのできるこれら『新明解』を除く複数の辞書の記述で重要なのは、これらの辞書には従来の「がんばる」の意味しか掲載されていないという点である。「がんばる」の使用の実際と、我々の「がんばる」に対する理解の現状の一端を窺わせる。

しかしながら、従来の「がんばる」の意味だけではなく、新しい「がんばる」の意味に辞書として言及している点において『新明解』の記述は画期的である。

同様の視点から文例をあげるなら、以下のような例をあげることができる。

- (1)「北海道や札幌の発展とともに歩んできた施設なので、地元の方にもっと来てもらえるように頑張りたい」と意気込んでいる。(北海道新聞, 2004)
- (2)「特別枠の合格者十人が記者会見し、「これまでの経験を生かし、大阪の教育現場でがんばりたい」などと意気込みを語った。(産業経済新聞社, 2003)
- (3)「自分にとってはいい経験になると思っているので、毎日どれだけ目標スコアに近づけるか、頑張ってみたい」と、決勝ラウンドを前に決意を新たにした。(西日本新聞社, 2005)

これらはみな、「困難」や「忍耐」という意味合いからは遠く、主体的な躍動を感じさせる。「意気込み」や「決意」という語と共起することからもそのことが見て取れる。従来の一般的な理解によって規定される「がんばる」ではない「がんばる」が実はすでに一般的な「がんばる」の用法として使用されてもいるのである。

細かく見ていけば、「がんばる」はもっと多くの意味要素を持っている多義的な語だといえるだろうが、従来の典型的な「がんばる」と、それに違和感を生じさせる新しい「がんばる」の、2つの意味が今日の「がんばる」には共存しているということがわかる。

4.2. 「がんばる」の両義の意味要素

「がんばる」は、2つの意味要素を持つということがわかった。ひとつは、従来からある典型的な「がんばる」で、もうひとつは、新しい「がんばる」である。前者は、困難に耐え忍んで、何事かを遂行すべく努力を続けることであり、後者は、取り組むべき課題に対して、心躍らせながら、何事かを遂行しようと努力することであった。

この2つの意味要素を端的な語で定義するならば、先に少し述べたように「辛抱」と「挑戦」となろう。「辛抱」は、自分が望まない方向への流れに抗うべく、行為を遂行すること、であり、「挑戦」は、自分が望む方向へ流れを生み出すべく、行為を遂行すること、である。

両者に共通するのは、行為を遂行することである。それに対して両者を分かちつものは、前者が「辛抱」で、後者が「熱意」である。これを表にまとめると以下ようになる。

	心情	行為
従来の「がんばる」	辛抱	遂行
新しい「がんばる」	熱意	遂行

従来の「がんばる」と新しい「がんばる」との意味要素を整理すると、心情の部分と行為の部分の2つの意味要素が存在することがわかった。両者は、心情の部分において、耐え忍ぶという心情でいるのか、あるいは反対に前向きに捉えるのかで区別される。両者は同じ「がんばる」という語の意味ではあるが、明らかに異なる意味を担っ

ており、相容れない意味が共存していることになる。

この両者の違いが存在することが、ここまで明確に認識されてこなかったのである。

4.3. 意味要素の本質

心理的な部分に焦点をあてて考察するならば、なぜ「辛抱」するのかについて考える必要がある。辛抱は、今現在好ましい状況にない、あるいは状況がこのままでは悪化するという状況において、なんとかこの状況を持ちこたえさせたい、さらには打開していきたい、そのためには今、辛抱しなければならないという意味合いを持っている。一方、後者は、理想的な状況を現出させるために必要なことに対して、まだ取り組んでいない状況において、この状況に変化を生じさせるために、何事かに「挑戦」するのだという意味合いを持っている。

「がんばる」の2つの意味要素

- ・「辛抱」…自分が望まない方向への流れに抗い、自分が望む方向への流れを掴もうとする「変化への希求」。
- ・「挑戦」…自分が望む方向への流れを掴もうとする「変化への希求」。

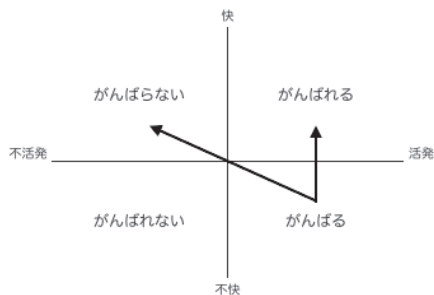
この両者に共通するのは、「現状を打開する変化を希求する」ことである。「がんばる」に内包された本質的な意味要素は、まず現状に満足しないこと、そしてそのうえで、変化への希求を持っていること、である。これが「がんばる」のもつ意味の本質である。

がんばる：現状を打開する変化を希求する。

結論として、「がんばる」というのは、何らかの「変化への希求」であるといえるだろう。

4.4. アンチテーゼとしての「がんばらない」の真意

「辛抱」と「熱意」とに区別された「がんばる」の「心情」は、川岸2011で論じた、「がんばる」の意味要素<快/不快>の意味分節に相当する。<快/不快>は、つまり発話者の気持ちのありようを捉えたものであり、「辛抱」は<不快>であり、「熱意」は<快>であるといえる。また、この表で「遂行」と規定されている「行為」は、<活発/不活発>の意味分節に相当する。「がんばる」や「がんばれる」は<活発>であるが、「がんばらない」や「がんばれない」は<不活発>である。



新しい「がんばる」の意味は、望ましくない<不快>+<活発>の状態から、望ましく<快>+<活発>の状態へ意味が変化したことを意味する。川岸2011では、この意味変化は、「がんばる」から「がんばれる」へ、語に助動詞を付加させることによって実現すると論じたが、新しい「がんばる」は、他の語の付加による意味付加に頼らず、「がんばる」一語において、意味が内部変化した。これは特筆すべき現象であるといえることができるだろう。

また、天沼2001において、「がんばらない」という語に価値を見出す現象が指摘されているが、これもまた、心情的な部分において、〈不快〉から〈快〉へと意味変化させるための運用上の動きだということができるだろう。「がんばらない」は、行為の部分で〈不活発〉にシフトしてしまうが、これは、行為そのものを拒否しているのではなく、〈不快〉な心情を抱きつつ、努力することを拒否しているのである。したがって、その真意は、〈快〉な心情で、努力することを意味する。さらに言えば、「努力する」という表現自体にも、そこに〈不快〉な要素があるとすれば、〈快〉の心情をもって、行為を遂行するというものが、天沼2001が指摘する「がんばらない」であるといえよう。つまり、ともに、「がんばる」が〈不快〉の意味要素を持つことに問題があり、そこを解消するために生じた現象を捉えたものであるということである。

4.5. 努力と不安

4.5.1. 不安の解消～「がんばる」の活路

「がんばる」の意味が「変化への希求」であるとすれば、自ずから見えてくることは努力に伴うそれが十全に遂行されなかった場合への「不安」である。この「がんばる」という行為を遂行することは、つねにこの不安を伴う。

したがって、これを他者に向けて使用するとき、不安をも他者に対して強要していることにもなってしまう。そこで相手が不安を甘んじて受け入れられる状況であれば、これを激励として好意的に受け取ることができるが、そうでなければ精神的な圧迫としか感じられなくなってしまふ。その結果、「がんばれ」や「がんばってください」と他者に対して使用すると、それを言われた他者は、それを言った者の思いとは裏腹に、不快感あるいは嫌悪感を感じてしまうという事態になってしまうのである。

この構造を理解すれば、「がんばる」はどう使用すべきか少しずつ見えてくるのではないか。まず、他者に対して使用するときには慎重にならなければならない。それでも使う場合はどうしたらよいか。上記を踏まえるならば、遂行する必要のある行為であるならば、その不安を共有する表現が求められる。たとえば「がんばろう」である。

「がんばろう」といえば、「がんばろうKOBE」が思い出される。1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災で、神戸は甚大な被害を受けたが、その神戸を本拠地とするプロ野球球団オリックス・ブレーブスもそれは同様であった。この球団が巨大災害から立ち上がるために団結の合言葉として生み出した「がんばろうKOBE」は、「がんばろう」の意図がもっとも象徴的に発揮された事例であろう。

天沼2001にも、この震災にまつわる「がんばる」の例が紹介されている。

1995年1月17日、大地震が神戸を始め兵庫県各地を襲い、大きな被害をもたらした6千名に上る死者を出した。その際にも、被災地から遠く離れた安全なところから、悪意はないけれどもあまりに安易に「頑張れ、神戸」「被災地の皆さん、頑張ってください」といった声が多く、被災者の人々に寄せられた。こうしたマスコミ等の決まり文句に対して、多くの被災者は、意を強くするどころか、「頑張れへんところに、高いところから『頑張れ』って言われたかて、一体、何をどう『頑張っ』たらええねん」といった反発心を抱いた。(p129)

声をかける方にはまったく悪気のない「がんばれ」や「がんばってください」という言葉は想

像以上に言われた方には嫌悪感を抱かせてしまっている。しかし、同じ震災関連の記事に以下のようなものがあつた。神戸を本拠地に持つプロ野球チーム、オリックス・ブルーウェーブのスペシャルサイト「がんばろうKOBE」に掲載されている当時の監督である仰木彬氏の記事である。

福岡の自宅から神戸に戻れたのは震災から10日後だった。直行したのは神戸市役所。ロビーは被災者でいっぱいだった。痛々しさと生々しさ。お見舞いの意味もこめてみなさんと握手をしていたら、「頑張ってください」と言われた。住むとこや食べることを心配しなければならない状況で、「頑張ってね」と言われる。「頑張らなきゃ」と思ったな。(『使命感 胸に「がんばろう神戸」を合言葉に希望のリーグ制覇』神戸新聞2005年1月12日より抜粋)(「がんばろうKOBE」スペシャルサイト)

「頑張ってください」や「頑張ってね」は、時として嫌悪感を抱かせる表現であるはずだが、ここではまったく違っている。なぜか。従来の意味での「がんばる」が必要とされる人が、同じ「がんばる」が必要とされる人に「頑張って」と言うことは、つまり、「ともにがんばる」ということを意味する。それが表現として結実したのが、1995年のオリックス・ブルーウェーブの合言葉「がんばろうKOBE」だといえるだろう。この合言葉のもと、同球団はリーグ優勝を成し遂げた。

「がんばろう」が命令や指示になってしまっただけではいけない。本心から「ともに」がんばろうという気持ちがあればこそ、この語は生きてくるのだろう。

5. おわりに

5.1. まとめ

「がんばる」は、もう語源的な意味や従来の意味だけではなくなりつつある。この変化の動きは、努力して何事かを遂行するに際しては、歯を食いしばって耐えるのではなく、前向きな情熱によって遂行されるべきだ、という時代の流れも影響しているように思う。

かつて、「楽しんできます」という言葉がさかんに使用された。トップアスリートたちが、極限の状況で最高のパフォーマンスを発揮するには、メンタルの前向きさが必要だということを踏まえてこの語が選ばれたのだろう。しかし、そこに「努力」という何事かに挑戦する意味合いはない。極限の状況に立ち向かうには、我々にはどうしても「努力」は欠かせない。そこを加味する言葉が求められた。その結果、他の言葉で代替するのではなく、「がんばる」を内在する意味を活かす形で変質させることによって、表現したい意味を表す新しい意味をもつ言葉が生まれてきたわけである。

なぜ新しい意味が生まれたのか。心情の部分に飽きたらない我々の思いがあつた。忍耐と熱意を対比させてはいるが、忍耐の中には静かな熱意があるからこそ、耐え忍ぶことができるし、熱意には、困難に耐え、それを乗り越える力もまた必要とされる。両者は、その心情のいずれの部分も表面的に出ているかの違いでもあろう。

「がんばる」は多様な状況で使用されるので、そのひとつひとつを網羅的に言及することはできないが、上記の論考から注意すべき点は、2つある。

ひとつは、安易に他者に対して使っただけではいけない。気心の知れた友人などであれば使うことができそうであるが、そうとも言えない。たとえ気心が知れていても、大きな不安を抱えている他者に対して使用すると、言われた方は負担に感じるだろう。好意としての激励が、無遠慮かつ傲

慢な物言いになりかねない。だから、「がんばる」は、自らに対して使用することはできるが、他者に対しては慎重にならなければならない語なのだとと言えるだろう。

そのうえで、もうひとつは、どうしても他者に対してこの「がんばる」を使うのであれば、「がんばれ」ではなく、「がんばろう」という形にすべきであるということである。「がんばろう」という形で努力を共有すれば、それは好意として受け取られる可能性が高い。「がんばる」ではなく「がんばろう」であれば、上記のような反感をかうことはないだろう。ただし、「がんばろう」が「～しなさい」といった命令や指示の意味しか持たないなら、結局反感を抱かれることになるだろう。情熱を持って努力を遂行することを本気で共有する。これが「がんばろう」であって、他者に対して使用できる「がんばる」の活用事例である。

5.2. 今後の課題

ここまで「がんばる」の新しい意味要素について論じてきたが、今後、これとは別に「がんばらない」という語の示す価値が存在感を増していくだろう。＜快＞であることを追求するという意味で、＜快＞＋＜活発＞としての「がんばらない」という語を選択する場合の他に、＜快＞であるために＜活発＞であることをも放棄する、＜快＞＋＜不活発＞としての「がんばらない」という語の価値を追求する場合も増えていくように感じる。昨今のJ-POPなどの歌詞に見られるありのままの自分を肯定するような意味合いの歌詞が増えているのは、その証左であると感じている。そうするとまた「がんばる」という意味要素も変化していくように思う。その変化を時を移さず把握していくために、つねに「がんばる」の使われ方を観察し続け、記述し続けることが必要であろう。

参 考 文 献

- ・天沼香「時代相の変化とコア・パーソナリティー－「頑張る」日本人と「頑張らない」日本人－」『東海女子大学紀要』21, 2001年
- ・天沼香『「頑張り」の構造－日本人の行動原理』吉川弘文館, 1987年6月
- ・天沼香『日本人はなぜ頑張るのか－その歴史・民族性・人間関係』第三書館, 2004年3月
- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言 1.1.0, 国立国語研究所
- ・『日本国語大辞典』小学館
- ・『スーパー大辞林3.0』三省堂
- ・『新明解国語辞典』三省堂, 2011年12月
- ・『岩波国語辞典 第7版』岩波書店, 2011年11月
- ・川岸克己「フロー理論で構築する「がんばれる」の概念構造」『安田女子大学国語国文論集』第41号, 安田女子大学, 2011年1月
- ・川岸克己「「頑張る」における構造と変化」『安田女子大学紀要』第39号, 安田女子大学, 2011年2月
- ・「がんばろうKOBE」スペシャルサイト (<http://www.buffaloes.co.jp/expansion/kobe/concept.html>)

[2015. 6. 25 受理]